

育友会創立60周年記念座談会

誰がために育友会



平成27年度会長
ほんだひでお
本多英夫

平成29年度会長
とうひらゆたみ
東平豊三
(現相談役)

会長
ささきさとし
佐々木 悟

主任教授
しょうきくひろ
庄 菊博
(法学部教授)

平成28年度会長
いずもたかし
出雲高志
(現顧問)

社会で大きく飛躍するための助走期間でもある大学時代。
それゆえ学生たちは進路や人間関係に悩みもする。
そうした大学生の子供とどう向き合えばいいか。
答えは決して一つでない。百人いれば百通り。
子育ての迷いや、喜び。そこで育友会はどんな役割を果たせるか。
現会長と歴代会長、育友会を見守る庄先生も交えて話が弾む。

育友会、参加したからこそわかること

——皆さんが育友会の活動に参加されたきっかけは何でしたか。参加したからこそ気づいたことがあれば教えてください。

佐々木：私は3人の子供のうち一番下の息子が専大

に通っています。上の子供のときは仕事が忙しくて、何もしてあげられませんでした。定年が近づき、ある程度余裕もできましたので、末っ子が大学に入ったときは就職などの参考になるかと思って育友会に参加しました。参加してみると仕事を離れて利害関係もない付き合いができて、すごくよかったですと思っています。会長を引き受けるにあたっては、1

万7,000人の会員を束ねるには全員のベクトルを合わせることが必要と考えました。そのための活動の指針として、この一年は「ご父母には安心を、学生には自信を」というモットーを掲げて臨んでいます。

東平：私もそれまで仕事が忙しく、父母の活動は大学デビューでした。入学当時、娘は受験に失敗して落ち込んでいましたが、でもそんなに落ち込むようなことなのかな、私が専修大学の実際を見てみようと思ったのがきっかけです。知ると私自身が大学を好きになり、そんな私を見て娘も自信を取り戻しました。こうした私自身の経験から、会長を務めた1年間は会員の皆さんに大学を好きになってほしいという思いで活動しました。

出雲：私も高校まではPTAにもほとんど関わってきませんでしたが、かえって先入観なく参加することができました。本部役員と埼玉支部役員の両方を兼務させていただきましたが、先輩方から親切にご指導いただきました。この歳になって新しい人との出会い、つながりができて、人に感動し、感謝できるという機会が非常に多く、得難い経験になったと思っています。

本多：私の場合は自身が専大の卒業生です。卒業後は、野球部やラグビー部など体育会の活躍は新聞などでも気にはするものの、大学との関わりは薄れていました。息子が自分と同じ商学部マーケティング学科に入学したので、折角だから母校に関わろうという思いで育友会の活動を始めました。

——皆さん会長まで務めました。お子さんやご家族の反対はありませんでしたか。

佐々木：私は息子には一切言わずにやってしまったので(笑)。

出雲：妻からは「仕事も忙しいのに大丈夫？」なんてことも言われました。しかし会長として入学式で祝辞を述べる原稿を準備していた際には、妻や娘が「こんな内容にしたら」とアドバイスをしてくれたり、予行演習に付き合ってくれたり、最後は家族が一体になって取り組めたのは嬉しかったですね。

——庄先生は長年、育友会を見てきて育友会員のの変化を感じることはありますか。

庄：昔は本部も支部も役員は男性が多かったですね。創立当初、昭和30年代の写真を見ても、総会に出席しているのはほとんどが男性です。ただ、育友会ができたきっかけは、あるお母さんの「大学のことをもっと知りたい。そのために大学と父母を結ぶ組織を作りたい」という一声でした。また今の支部懇談会の元になった地方懇談会においても、「先生方、ぜひ来てください」という長野県のあるお母さんの声がきっかけでした。今では役員も女性が増えて活発になってきたという気がします。昨年度は東平さんが女性として初めて会長になりましたね。

東平：本当に重責ですので果たせるのかという不安もありました。会長は大学や卒業生の会である校友会との付き合いも多く、特に校友会は年配の男性が多いのでどう思われるかなと心配もしましたが、蓋を開ければとてもかわいがっていただいて、勉強になることも多く、むしろ楽しませていただきました。

大学生の我が子との距離感

——皆さんは、大学生の子供とどう関わりましたか。その際、育友会活動が影響したことはありますか。

佐々木：親からすれば子供はいくつになっても子供



ですが、ただ大学生となるとそれなりに大人なので、尊重すべきところもあって距離感は難しいと思います。私は学生時代、父親とそれほど会話をしたわけでもなく、同じように息子と会話は少ないです。息子は大学が第一志望でなかったために入学してからも長いこと落ち込んでいるようなところもありました。でも半年間の海外留学をして帰ってくると、とても自信を取り戻しているように見えました。専修大学の留学プログラムなど、育友会を通していろいろと情報が入ってくるので、子供が悩んでいるときにそっと背中を押してあげられたのはよかったです。

東平：うちは女の子なので安全に大学に通えるかということをお心配していましたが、大学のことがわかってくると、浮わつた学生もいないし、娘からもまじめな人が多いということを知って安心しました。あと心配だった就職の情報も、育友会の活動を通して知ることができました。子供よりも詳しくなりすぎて、老婆心でアドバイスしすぎたため嫌がられました（笑）。自信をもってアドバイスできるのでよかったです。

出雲：私の場合、娘の通学と私の通勤ルートが途中まで一緒なので、よく電車で話をしながら通っていました。今こんな勉強しているとか、ゼミでこんな課題に取り組んでいるとか、話し方や発言で成長も垣間見られ、私にとっては嬉しい時間でした。おそらく育友会の役員になっていなかったら、年に1回、鳳祭に行くくらいしか大学との関わりはなかったと思いますが、育友会活動で大学のことを知ることが多いので、共通の話題でコミュニケーションも取り

やすかったです。

娘は1年次から「大学に行くのが楽しい」と言っていて、それが親としてはすごい喜びでした。卒業が近づくと娘はあと何日しか大学に行けない、さみしいと言いながら通っていたくらいです。

本多：うちの息子は入学前の3月に学生部主催の合宿イベントに参加して、それがとても楽しくて、「専大でやっていこう」という意欲がわいたようです。専大に合格した時に彼に言ったのは、「とてもいい大学だから行った方がいい」と。私自身が学生時代に専大でいい仲間いい先生と出会ったから、必ずそういうものが見つかると話しました。息子は学生スタッフの活動がすごく楽しかったようで、普段は朝起こしてもなかなか起きないのに、オープンキャンパスで学生スタッフとして大学案内するときは自ら起きて早くから出かけていました。佐々木さんのところと同じで、男の子なので大学での話はしてくれないのですが、本人が意欲的に取り組んでいればそれでいいと思って、自主性に委ねて見守っていました。

庄：第一志望でなく入学してきた学生さんもいますが、案外本人よりもご父母の方が落ち込んでいることがあります。学生を元気にするには、まずはご父母が元気になる、大学に愛着を持つということが必要じゃないかという気がしています。私もいろいろと提案し、かつては東京ABC支部懇談会で育友会員でもあった浜田幸一さんや卒業生の堀井学さんといった著名な方に講演いただき、学生の三曲研究会の演奏を聴きながら茶話会を開くということもしま



した。それも専修大学を好きになってもらい、帰りには専修大学の名入りの封筒を堂々と持って帰ってほしいという思いです。最近では親御さんに浸透して、支部懇談会で支部役員の方が専大のTシャツを着てイキイキとしている姿があります。「成人になってなぜPTAか」という批判もあるかもしれませんが、親にとって子供はいつまでも子供、適度な距離感を保てば決して過保護ではないのだと思います。

未来に向けて、 育友会、そして専修大学への思い

——育友会の未来に期待することはありますか。

佐々木：今年育友会が創立60周年を迎えるにあたり、歴史を振り返ってみました。『専修大学育友会三十年史』（平成5年刊）を読むと、育友会が誕生した昭和33年は戦中派の方々のご子女が大学に進学してきた時期だとありました。自分が大学で学びたかったけど大学に行けなかった、もしくは学んでいただけ途中で戦場に出されたという人が多くて、我が子を通して自分の母校のように感じて育友会を育てたという記述もあって、感銘を受けました。そういった伝統を引き継いで、未来にもつなげていけたらと思っています。

東平：育友会本部について思うのは、私たちの役割って、これだけの予算を預かって運営しているのだから「会員のために」ということを忘れてはならないということです。その一環として、全国の会員が専修大学を好きになり、大学を支援していただくということが育友会のよい活動につながっていくと思っています。60年も脈々と続く伝統ある会ですから、その役割を絶対に忘れてはならない。そのことは特に本部、支部の役員には伝えたいです。大学と子供を応援する気持ちを忘れずに、そのうえで自分たちも楽しんでいただければというのが私の願いです。

出雲：育友会はボランティア活動ですので、その基本は人様のために各自が社会で得た経験や強みを持ち寄って取り組むということかと思っています。私自身も仕事柄、広告宣伝に携わったこともあったので、知識を活かして印刷物の経費削減に向けてアイデアを出したこともありました。そのように各自が人生経験を活かし、自分のできることをさせていただくという気持ちで取り組んでいただけたら、やりが

いや成果にもつながるのではないかと思います。

それと、今から60年前に、インターネットはもちろん電話すら各家庭にないような時代に組織が設立され、これだけの活動を続けてきました。今はメールや携帯など通信手段が発達しましたが、それに頼りすぎて、お互いの気持ちを汲み取ることやコミュニケーションの大切さを忘れてしまうと活動もぎくしゃくしたものになりかねない。人と人のつながりを大事にすれば組織はよい方向に向かうと感じています。

本多：中には無理をして役員をやられている方も見受けられます。肩の力を抜いて、各自がやれる範囲でやれば、十分じゃないかと思います。どんなに頑張っても4年間です。そこでできることは何かを考えて、多くの人を巻き込みながら楽しんでやっていただけたらと思います。

それと学生に対して望むのは、やりたいことがあったらどんどん打ち込んでもらいたいということです。それで成功体験ができれば、自信がつきます。そういう場が専修大学にはあるので、それを活かしてほしいです。あとこれは蛇足になりますが、スポーツが強いと大学としてのネームバリューも上がりますので体育会には活躍してほしいし、一般の学生もたまには授業をさぼってでも（笑）、応援に行ってもらいたいですね。

庄：皆さんがそのような思いで育友会に関わっていただいているのはありがたいことです。いろいろな情報伝達の手段が発達した時代になっても、大きな予算をかけて全国で支部懇談会を開催するのはなぜか。普段子供たちが話している大学の教職員はどういう人なのか、じかに会ってお話ししてくださいということなんです。ネットの情報だけでなく、やはり今の時代、そういったアナログな部分が重要なかなという気がします。

私は育友会に対して助言する立場ですが、どういう基準で最終決断をしているかといえば、「それが学生のためになるのだろうか、そして育友会の1万7,000人の会員の利益になるのだろうか」ということです。専修大学の育友会は、他大と比べてもきめ細かい実質的な活動をしています。子供の成長を見守り、大学をサポートしていくという、育友会と学生と大学との関係は、この先も続いていくと思っています。